

祈る人々

1955年に地元の網元（漁業経営者）の枕元に白狐が現れ「吾をこの地に鎮祭せよ」というお告げから県立された**元乃隅稻荷神社** 商売繁盛、大漁、海上安全などの大神として地域の人々に信仰されている。

最近では、アメリカのニュース放送局が「日本の最も美しい場所31選」のひとつとして発表され、観光客も増えている。昔は地元の人が漁業で成功するため、海の上での安全を祈る人々が多く訪れていたが今では、鳥居を見に来る人も多く訪れている。

これからは漁業や農業の一次産業だけでなく**観光客を取り入れた第三次産業**も進んでいくのではないだろうか。

自然に生かされるまち

変わらない風景

変わっていく産業



緑に触れる人々

「ゆや」にある**棚田**は、景色として楽しむ人が多い。

第一次産業の農業を職とする農家は少子高齢化の影響で年々減っている。昔は**田植え**をする行事など盛んに行われ、にぎわっていた田んぼも今では使われていないところもあるが、緑を作り続けている人たちも。その中でも毎年にぎわっている棚田を見る観光客のために**喫茶店**が作られた。少なくなってきた第一次産業をカバーする形で**第三次産業**を少しずつ取り入れているのだ。

ゆや



海と暮らす人々

「ゆや」は**海**に面している地域が多く、第一次産業の漁業が盛んである。漁協は面積(93.27 km²)に対して8つある。**漁師**が魚介のものを獲り、それに手を加え加工品にして地域の外にも販売している。昔から海が近いことを生かした産業をすることで、ここの人たちは自分たちの地域に貢献し生活している。漁だけではなく海そのものを楽しんでもらうための**海水浴**という形で**第三次産業**も進んでいる。